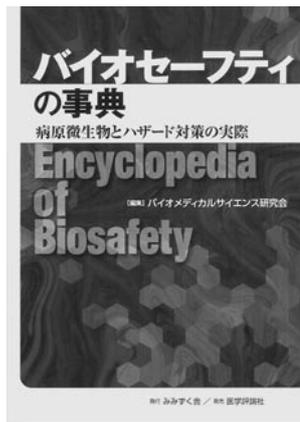


書籍のご紹介

【バイオセーフティの事典 病原微生物とハザード対策の実際】

編集：特定非営利活動法人 バイオメディカルサイエンス研究会



発行：みみずく舎／医学評論社

電話：03-5330-2442

定価：12,600円（本体12,000円＋税）

この度、バイオメディカルサイエンス研究会（編集委員長 小松俊彦）編集による「バイオセーフティの事典 病原微生物とハザード対策の実際」が刊行された。本書の前半の総論では、バイオセーフティの歴史的背景や原理、必要な設備の具体的な構築および管理法を系統的に説明し、後半の各論では対象となる病原体ごとに、それぞれの生物学的性状から扱い方までをコンパクトに漏らすことなく整理したものである。

各研究施設で感染症研究が遂行されているなか、2001年の米国における炭疽菌混入郵便物事件を背景に、医学研究施設からの病原微生物による生物テロを防止するためにも、病原微生物の管理が見直されることになり、2007年6月、改正感染症法が施行された。本法令では、日常臨床で分離される微生物や、高度に病原性が高く、従来から扱いに厳しい制限がかかっているものを、一種病原

体から四種病原体までにあらためて分類し、所持、輸入、運搬などの取り扱いを規定している。我々、病院検査室においては、結核菌の扱いが解決すべき最初の課題となる。結核菌は、感受性・耐性に関わらず BSL3 (Biological safety level: 1 から 4 まであり、BSL3 の微生物は、感染性エアロゾルの封じ込めが必須であり、陰圧の隔離された実験室で扱う。) であり、早急な検査室の整備が必須となる。現在、大学における微生物学研究室や病院検査室などでは、施設内規則の見直しが求められており、それぞれの施設で、「バイオセーフティ委員会」などが設置され、施設内の取り扱い基準が制定されている。本書のごとく、現法令に基づいた解説書は、まさに時宜にかなった企画といえる。

(昭和大学医学部 臨床病理学教室 教授 福地邦彦)